

## 講演会・シンポジウム報告

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2019 年度講演会・ワークショップ

講演会・パネルディスカッション、ワークショップ  
「マジョリティの特権を考える—真のダイバーシティをめざして—」

日時：2019 年 6 月 1 日 (土) 10:00-15:00

場所：国際基督教大学ダイアログハウス 2 階国際会議場

参加人数：講演会 38 名 ワークショップ 33 名

講師：出口 真紀子 氏 (上智大学外国語学部教授)

パネリスト：上川 多実 氏 (BURAKU HERITAGE 創立者)

河 庚希 氏 (明治大学大学院特任講師、国際基督教大学平和研究所研究員)

ディスカッサント：小澤 伊久美 氏 (国際基督教大学課程上級准教授)

呉 恵卿 氏 (国際基督教大学課程准教授)

講演の概要：

社会のマジョリティ側にいる人は自分の持つ特権 (労なくして得る優位性) に構造上なかなか自分自身で気づくことができない。自分の持つ特権に気づかなければ、社会的な不平等はマイノリティ側を不利な立場にするものと捉えられたとしても、マジョリティ側の立場を優位にするものだという捉え方はなかなかしないものである。真の意味でのダイバーシティとインクルージョンを実現するためには、今まで不問にされてきたマジョリティ側の特権や心理的特徴に焦点を当て、「自分は何も変わる必要がない」「差別なんかしていない」「自分はいい人である」と思っているマジョリティ側の心理を可視化させ、「特権」に関する理解を深めることが大切である。

〈報告〉

この講演・ワークショップの目的は、日本社会や他国のマジョリティの特権 (権力を含む) への気づきを促し、真のダイバーシティとは何かを参加者に考えてもらうことであった。当日は、「立場の心理学：マジョリティの特権を考える」というテーマについて長年研究され、国内外で研究発表をされている上智大学の出口真紀子先生をお招きし、午前 10 時から午前 11 時まで出口先生の講演、その後午前 11 時から正午まで出口先生、上川多実氏、河庚希氏、小澤伊久美氏、オ・ヘギョン氏によるパネルディスカッション、午後 1 時から午後 3 時まで上川多実氏、河庚希氏をファシリテーターとする参加者とのワークショップを実施した。

講演、パネルディスカッション、ワークショップを通して、特権的集団の特徴 (文化的・制度的支配、正常性 Normalcy、優越性、特権) や個人レベルでの特徴 (特権があるという認識の欠如、優越感と権利意識、社会的抑圧の現実を否定・回避する、自分に特権があるという認識に抵抗を示すなど) について学ぶことができた。特権集団の心理的特徴やアイデンティティの社会化のプロセスを学び、自分自身の生い立ちを含めて振り返りながら、学んだことを自己の立場と位置づけて応用させることを学んだ。ICU には多様なアイデンティティを持つ教員や学生がいるが、それぞれの人がどのように自分のアイデンティティや特権について考え、向き合ってきたか、そしてマイノリティの立場にいる人々はどのように特権がなかったか、また特権を持つ人と接する上でどのような要望があるかなどについて講演・パネルディスカッション、ワークショップを通して考え、気づきを得ることができた。これらの気づきは言語を学ぶ上でも教える上でも欠かすことができないものであると思う。(文責：岩田祐子)

## 2019 年度連続講演会

日本語を家庭内言語としつつ「多言語文化環境に育った」大学生への日本語教育

## 第一回講演会・ワークショップ

## 『日本語非母語話者の読解コーパス』からわかること

日時：2019年7月6日(土) 10:00-12:00 講演 13:00-15:30 ワークショップ

場所：国際基督教大学本館1階116教室

参加人数：講演会72名 ワークショップ41名

講師：野田 尚史氏(国立国語研究所教授)

## 講演の概要：

日本語学習者が日本語を読んだ時、頭の中でどのようなことを考え、どう理解したかは、外からはなかなかわかりません。学習者の読解過程がわかる調査方法によって集めたデータをもとに、学習者がどのように読解を行っているかをいっしょに考えていきましょう。

## 〈報告〉

本講演では、日本語学者を対象とした読解研究の重要性、「日本語非母語話者の読解コーパス」の調査方法とその分析結果、そして、読解研究のさまざまな課題について解説があった。

まず、日本語学習者を対象とした読解研究の重要性が指摘された後、「読解コーパス」の調査方法について説明があった。読解とは文字からその意味を理解することであり、「日本語非母語話者の読解コーパス」は、日本語学習者がその意味にどのようにたどり着くのか、その過程を知ることを目的として構築された。そのコーパスの調査結果からわかることとして、非漢字系中級日本語学習者の読解困難点、非漢字系初中級日本語学習者の推測ストラテジー、漢字系上級日本語学習者の読解困難点の3点が紹介された。非漢字系中級日本語学習者の読解困難点には、1) 漢字の意味推測に関する誤解、2) 比喩的表現の意味に関する誤解、3) 名詞修飾の構造に関する誤解、4) 主語の係り先の特定に関する誤解が見られた。初中級日本語学習者の推測ストラテジーについては、1) 漢字の意味や外来語の音声からの語句の意味の推測、2) 前後の語句からの語句の種類推測、3) 語句のつながりの悪さからの修辭的表現の推測、4) 助詞からの文の意味の推測、5) 前後からの重要な情報かどうかの推測、6) 文脈からの語句や文の意味の推測を行っている事例が見られた。漢字系上級日本語学習者の読解困難点には、1) 語の意味理解に関する読み誤り、2) 文構造の捉え方に関する読み誤り、3) 文脈・背景知識との関連づけに関する読み誤りがあった。どの点に関しても実際の事例と共に説明があり、聴衆からも活発な質問やコメントがあった。

ワークショップでは、実際に「日本語非母語話者の読解コーパス」にアクセスし、指定されたテーマの事例を探し、発表するというグループワークが行われた。小グループで具体的な事例を探し、ディスカッションをすることで、講演会で紹介された読解の困難点について理解を深められた。参加者は日本、及び海外の大学、日本語学校、各種専門学校や研修所など、多様な教育機関に所属しており、普段異なる教育機関で働く方が意見を交換する貴重な機会となった。

読解プロセス調査方法のノウハウを学ぶとともに、「読解コーパス」から見えた日本語学習者の読解困難点や推測ストラテジーをそれぞれの例と共に学ぶことで、日本語学習者がどのように読み、その読み誤りが何に起因しているかの一端を知ることができ、これからの指導方法について考える機会となった講演会、ワークショップであった。(文責：藤本恭子)

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2019 年度講演会

## 講演会

# The Theory of Knowledge in Japanese Schools: Reflections from the First Article One IB School in Japan

日時：2019 年 10 月 26 日 (土) 13:00-17:00

場所：国際基督教大学本館 1 階 116 教室

参加人数：18 名

講師：マイク・ポストウィック 氏

(加藤学園英語イマージョン・バイリンガルプログラム エグゼクティブディレクター)

### Content

Dr. Mike Bostwick gave a lecture on the Theory of Knowledge in Japanese schools. The Theory of Knowledge is a core subject in the International Baccalaureate (IB) education. IB offers a high-quality education that aims at fostering international-minded students. Understanding the concept of Theory of Knowledge is essential not only for those teaching at IB schools but also for any teachers who seek to nurture future global citizens.

### 〈報告〉

静岡県沼津市の加藤学園よりマイク・ポストウィック先生にお越し頂き、国際バカロレア (IB) の科目の 1 つである Theory of Knowledge (TOK) についてお話をいただいた。

TOK は IB の Diploma Program (DP) のコア科目であり、IB の全ての科目を繋ぐ非常に重要なものだとのお話であった。TOK の主な目的は、「学びへの批判的アプローチと知識の構築との連携」「自らの信念やアサンプションを批判的に見直し、思慮深く、責任感と明確な目的を持って生きる」などである。そのために問われる中心的问题是、「自分が持っている知識を我々はどのように知るに至ったか」という問いである。様々なトピックについてグループディスカッションを通して考えることにより、自分が当たり前だと思っている知識を批判的に捉えるのである。TOK では「歴史」「言語」「生物」などの分野を相互に関連付けながら扱う。例えば歴史では、「第一次世界大戦で最も責任があるのは誰か」という問いは低次的なものであるが、TOK で扱う問い (Knowledge Question) は、「第一次世界大戦について学ぶ上で、国家的バイアスはどれほど影響するのか」という、より高次的なものである。そのような説明のあと、最後には実際に美術や文学を扱った TOK の授業でどのような問いがなされるのか、デモンストレーションがあった。加藤学園での実際の授業の様子ビデオも見せて下さり、具体的に授業がどう進行するのか垣間見ることができた。参加者はグループディスカッションを通して実際の TOK の授業を体感し、また積極的に質問をし、学びを深めることができた。

(文責：小林洋子)

## 講演会 Facilitating Critical Thinking in the Classroom

日時：2019 年 12 月 14 日（土）13:00-17:00

場所：国際基督教大学ダイアログハウス 2 階国際会議場

参加人数：30 名

講師：ジョージ・クマザワ 氏（昭和女子大学附属小学校講師）

### Content

Mr. George Kumazawa gave a lecture on critical thinking education. The presentation consisted of three sections as below:

Part 1: Kindergarten Lesson (CT / Moral Education)

Part 2: Grade 6 Lesson (CT / Career Education)

Part 3: High School Lesson (CT / TOK)

### 〈報告〉

昭和女子大学附属小学校のジョージ・クマザワ先生をお招きし、クリティカルシンキング(批判的思考力)を育てるための授業実践について講演していただいた。幼稚園、小学校、高校という3種類の教育現場において、授業にどのようにクリティカルシンキングを取り入れているか、ご自身の実践例を中心にお話していただいた。それぞれの現場で使われている教材を活用し、教科書の到達目標を踏まえながら、クリティカルシンキングを取り入れていくにはどうすればよいか、参加者がそれぞれの現場で実践できるようなアイデアが数多く示された。

例えば、幼稚園での実践については、英語の絵本の読み聞かせの後、教師が子どもたちに適切な問いかけをすることにより、同じ物語を主人公以外の登場人物の立場から考える機会を与えることができることを、実際の授業風景のビデオを見せながら説明して下さった。また、小学校6年生の英語の授業では、教科書を使った職業の名前の学習をきっかけに、今はなくなってしまった職業や将来なくなるかもしれない職業についての調べ学習に発展させるという授業展開や、将来就きたい職業についての会話練習を発展させ、様々な職業の社会的価値をマイナス面も含めて多角的にとらえ、自分の職業観を見つめなおす機会を持つという授業展開などの例が紹介された。

本講演は、講師の質問に対する参加者の答えやコメントを即時に共有することができるアプリケーションを用いて、双方向型で行われた。また、参加者同士の意見交換の機会も豊富にあり、非常に有意義な4時間であった。

(文責：小泉ユサ)

グローバル言語教育研究センター (RCGLE) 2019 年度講演会・ワークショップ

2019 年度連続講演会  
日本語を家庭内言語としつつ「多言語文化環境に育った」大学生への日本語教育

## 第二回講演会・ワークショップ「継承語教育を考える」

日時：講演会：2020 年 1 月 11 日（土）13:00-16:00

ワークショップ：2020 年 1 月 12 日（日）10:00-15:30

場所：講演会：国際基督教大学本部棟 2 階 206 号室

ワークショップ：国際基督教大学本館 1 階 170 教室

参加人数：講演会 49 名 ワークショップ 25 名

講師：ダグラス 昌子 氏（カルフォルニア州立大学ロングビーチ校名誉教授）

講演の概要：

### ■講演会■

第一部：米国における継承語教育：アドボカシーと連携の大切さ

第二部：トップダウンの教育方法としての内容重視のアプローチについて

### ■ワークショップ■

「継承語教育における教材作成」個別化教授法とスキャフォールディング

〈報告〉

本講演では、継承日本語教育に長年携わっておられるダグラス昌子氏をお招きし、米国における継承日本語教育の現状と氏の長年の研究成果から得られた知見を体現するための教育実践、教育理論をご紹介いただいた。また、具体的な教材作りや教師支援に関するワークショップも実施した。

講演の第一部では、移住者の国である米国の継承語教育の歴史、現状、そして課題の分析をふまえ、アドボカシーと連携の大切さについて学んだ。また、日本で増えつつある移住者の子ども達への継承語教育に関する議論も行った。第二部では、継承語教育における研究で効果的とされる、トップダウン式指導法を用いた内容重視のアプローチで学んだ際の学習効果に関する研究結果と、その結果に基づいた具体的な学習活動についての紹介があり、言語力に差があるクラスにおいて効果的な学習活動について学んだ。

ワークショップでは、まず、言語力に差がある学習者が混在するクラスで、内容重視のアプローチを用いる際に必要なストラテジーとして、学習効果を高めるための個別化授業（Differentiated Instruction）と学習を支援するためのスキャフォールディング（足場作り）について説明があり、参加者は理解を深めた上で、教育対象別にグループに分かれて教材作成の作業を行った。その後、各グループの成果を発表し、全体での相互批評を通じて課題・問題点を共有した。

今回の講演とワークショップを通して、日本で増えつつある移住者の子ども達への継承語教育に対する示唆を得ただけでなく、広く語学教育で効果的だと考えられているアプローチについても知見を深め、今後の言語教育における指導方法について考え学ぶことができた。大学の教員や研究者だけでなく、様々な機関で継承語教育に携わる方々の参加があり、対象も児童から中高生、大学生と多様であった。また、九州や海外など遠方からの参加もあり、貴重な情報共有やネットワーク作りの場にもなった。

（文責：藤本恭子）